様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

平成 ２９ 年　 ６ 月　 ２ 日現在

機関番号：１２６０１
研究種目：若手研究(B)
研究期間：2013～2016
課題番号：２５７７０１２３

研究課題名（和文）現代ロシア文学・文化論におけるシニシズムとナショナリズム

研究課題名（英文）Cynicism and nationalism in contemporary Russian literature and cultural theories

研究代表者
乗松　亨平（NORIMATSU, Kyohei）

東京大学・大学院総合文化研究科・准教授

研究者番号：４０５８８７１１

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　2,700,000円

研究成果の概要（和文）：本研究課題は、現代ロシア文化において顕著になっているナショナリズムについて、後期ソ連以来のロシア社会の特徴といわれるシニシズムとの関係から検討するものである。現代ロシアを代表する思想家・学者たちにインタビューを行うなどの調査、国際学会における複数の報告などを経て、主要な成果として、日本語での著書『ロシアあるいは対立の亡霊：「第二世界」のポストモダン』を刊行した。

研究成果の概要（英文）：This study aims at examining nationalism in contemporary Russian culture in relation to cynicism, which has prevailed in Russian society since the late Soviet period. I had interviews with several prominent Russian scholars, read papers at international conferences, and, as the main result of this study, published a book in Japanese "Russia, or the Specters of the Opposition: Postmodernity in the 'Second World.'"

研究分野：ロシア文学・思想

キーワード：ロシア文学　ロシア文化　ロシア現代思想　ナショナリズム　シニシズム　記号論　ポストモダン

１．研究開始当初の背景

私はこれまで、1960 年代以降のロシア人文学で大きな潮流となった文化記号論について、同時代のソ連社会との関わりを研究してきた。西側で記号論や構造主義が退潮したのちも、ソ連・ロシアで記号論が 1990 年代まで盛んだったことの背景には、特殊な「文学（言語）中心主義」があったと考えられる。ソ連では文学が中心的芸術ジャンルと位置づけられ、大衆プロパガンダの手段とされた。公式に認められた唯一の様式「社会主義リアリズム」は、実際のソ連の現実とはかけ離れた理想像を「現実」として描きだすものだった。後期ソ連では、メディア上の表象と現実との乖離が広く意識されつつも、公の場においては、公式的表象の正しさをあたかも信じているかのように振舞いつづける、というシニシズムが蔓延したといわれる。ここから生じたのが、文学・言語記号の恣意的な操作性に対する認識であり、記号論への関心もこれと結びついていたと考えられる。

公式的表象・言説が「約束事」にすぎないことを認識しつつも、公の場ではそれに従いつづけるというシニシズムが、全体主義社会を支える基盤になったという見方はすでに注目されており（P・スローターダイク、S・ジジェク、A・ユルチャクら）、さらに現代日本についても、似たようなシニシズムとナショナリズムの結びつきが指摘されている（北田暁大ら）。本研究は、シニシズム的なソ連人の行動・文化様式が、ペレストロイカ以降のロシアでどのように変化・発展したかを明らかにしようとするものである。特に、後期ソ連のシニシズムと密接な関係があった文化記号論のその後の展開を文学理論・文化批評にたどることで、シニシズムの変化を明確に跡づけたい。

２．研究の目的

（１）ペレストロイカからエリツィン期（1980 年代半ば～90 年代）には、ロシア＝ポストモダン論が批評界を賑わせた。共産主義という「大きな物語」の崩壊に加え、メディア上の表象は対応する現実をもたない「シミュラークル」である、という「停滞」期以来の認識がおもな論点となった。この意味で、ロシア＝ポストモダン論は「停滞」期の文化記号論と根本の問題意識を共有しており、その泰斗ロトマン晩年の著作が盛んに参照された。このような文化記号論とポストモダン論の継承関係について検討する（研究目的①）。

その一方で、両者のあいだには断絶もある。文化記号論は、多様な対象を扱いつつも中心に据えたのはつねに文学で、その担い手も多くは文学研究者か言語学者であった。それに対してポストモダン論では、映画や美術など視覚芸術の専門家がおもに論陣を張った。「文学中心主義」がソ連の権力を下支えしたという認識のもと、その克服が図られたことが背景にある。その際には文化記号論もまた、「文学中心主義」の圏内にあったとみなされた。なかでも V・ポドロガ、M・ヤンポリスキー、M・ルイクリンらは、「余白の哲学」というグループを結成し、記号に対抗するものとして身体に注目した。「余白の哲学」の身体論を、文化記号論への対抗として再考する（研究目的②）。

これらのポストモダン論は、ソ連の文化的遺産に対する攻撃を主たる目標としていた。しかしエリツィン期には、彼らの想定を上回る速度でソ連の遺産は風化していく。市場主義と個人主義が貧富の差を極大化し、マスメディアと大衆文化の急激な発達により文学はサブカルチャーに転落した。ソ連の遺産よりも、ポストモダン的社会の混乱のほうがむしろ問題化したことで、ポストモダン論は大きな転換を強いられる。

（２）プーチン期（2000 年代以降）のロシアに関して一般にいわれるのは、宗教などの伝統的価値に基づいた権威的社会統合の復活である。特に懸念されているのが大ロシア主義の復活で、ロシア・ナショナリズムが新たな「大きな物語」として政権を支えている。文化においてもナショナリズムやソ連へのノスタルジーが顕著となったが、本研究ではこの変化を、エリツィン期からの単なる反転ではなく、シニシズムの持続的発展として考察する。

文化記号論やロシア＝ポストモダン論には、ロシア文化を西欧文化と原理的に異なるものとして対照する、ロシア特殊論の系譜がある。ロトマンではそれはロシア文化を批判するための否定的特殊論であったが、ポストモダニストはその評価を逆転し、肯定的特徴として価値づけた。ロトマンにもポストモダニストにも、ロシアの特殊性を信じているというより、なんらかの実践的目的のためあえて信じてみせている、というシニカルな構図が共通する。M・リポヴェツキーや L・グトコフは、プーチン期のナショナリズム全般に、このような「あえて信じている」「本気ではない」という態度をみてとっている。ポストモダニストによるロトマンの再利用をとおし、現代のロシア・ナショナリズムに内在するこうしたシニシズム的傾向を分析したい（研究目的③）。

先述したように、シニシズムが全体主義やナショナリズムの基盤になりうるということは、世界的に指摘されている。近年のロシア・ナショナリズム論においては、ナショナリズムを論じる者自身が、ロシア・ナショナリズムの特殊性を唱えてそれを追認してしまう場合が目立つが、シニシズムという一般的現象を観点とし、他国におけるケースと比較することで、特殊論に陥らないロシア・ナショナリズム論を提示することが、本研究の最終的な目的である（研究目的④）。

３．研究の方法

「研究の目的」に記述した 4 つの具体的目的について、以下のプロセスに沿って研究と成果発表を行う。とりわけ、（２）（３）における人的交流を重視する。

（１）モスクワのロシア国立図書館を中心とする資料調査・収集……現代ロシアの図書、とりわけ盛衰の激しい雑誌については、日本の大学図書館の蔵書はきわめて不十分である。重要な論壇誌や批評家の著作を調査・収集する。

（２）関係者へのインタビュー……本研究の対象はここ 20 年ほどの現代史であり、事態はたえず推移している。資料は印刷メディアだけでなく、インターネットやさらに日常会話すら包含しうるものであり、その全体を視野に収めることは容易でない。また、シニシズムという観点も、学界で十分に検討され定着したとはまだいいがたい。それゆえ、資料の範囲および問題設定の妥当性を、研究の過程でつねに見直していく必要がある。そのために本研究では、対象となる文学・文化論の書き手たち自身へのインタビューを積極的に行い、その内容を資料として分析するとともに、そこから得られた知見を資料調査や分析方法にフィードバックする。公式的表象・言説をあたかも信じているかのように振舞う、というシニシズムを分析するうえで、インタビューにおいてさまざまな文脈からその点を問い、個々の回答間やメディアでの発言とのあいだの揺れを確認することは、有効な分析手法だと考えられる。

（３）平成 27 年度に日本で開催される中欧・東欧研究国際協議会（ICCEES）・世界大会でのパネル組織を中心とした国際的成果発表……ICCEES 世界大会は 5 年に一度開催され、毎回 2000 名近くの発表者が集まる、スラヴ・ユーラシア地域に関する世界最大の研究集会である。インタビューを行った現代ロシアの批評家のなかからパネリストを募りたい。欧米外で初めて開かれる本大会に高名な批評家を招聘することは、本研究の成果発表のためのみならず、大会全体の成功のためにも非常に意義がある。なお私は本大会の組織委員である。

４．研究成果

平成 25 年度には、L・グトコフ、B・ドゥービン、A・レイトブラトという、後期ソ連から現代にかけてロシアのリベラル派社会学をリードしてきた 3 人の学者に、モスクワでインタビューを行った。また、後期ソ連におけるシニシズムの中心的研究者 A・ユルチャクが来日した機会に詳しく懇談した。これらの交流と、ロシア国立図書館での資料調査をもとに、本研究の基本的見通しを固め、次年度以降に成果発表を行った。

国際的には、平成 27 年度に千葉・幕張で開催された ICCEES 世界大会に、グトコフに加え、現代ロシアで若手を代表する政治哲学者 A・マグーン、韓国で若手を代表するロシア文学者キム・スファンを招聘してパネルを組織し、立ち見の出る盛況となった。それ以外のものを含め、計 5 本の英語・ロシア語での口頭発表を行った。また日本語では、本研究にもとづく著書を刊行した。

簡潔にまとめれば、現代ロシアの文化論においては、欧米との対立にもとづくナショナリスティックな意識と、資本主義化された現在のロシアでそのような対立はすでに成り立たない、というシニカルな意識とが拮抗している。これはまた、権力との対立にもとづく知識人の伝統的アイデンティティが、そのような対立はすでに成り立たない、というシニカルな意識によって浸食される事態とも平行している。こうした状況は、ロシアに限らず世界的にみられる「ポストモダン的」なものといえるが、ロシアの文化論の特徴は、欧米や権力との対立という古い「大きな物語」を復興し、シニシズムに抵抗しようとする努力の執拗さである。著書においては、そのような努力が、たんなる復古趣味や保守化を超えて、いかなる新しい思想的可能性をもちうるのかを考察した。

５．主な発表論文等

（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計１件）

①乗松亨平「コサックとカウボーイ：フロンティア神話の終わりのあとに」、『ユリイカ』1 月号、青土社、2017、198-204 頁（査読なし）

〔学会発表〕（計 6 件）

① Kyohei Norimatsu, “The (Im)possibility of Solitude: From Communal Apartment to the Internet,” Symposium “On Art Power”、東京大学駒場キャンパス（東京都目黒区）、2017 年 1 月 20 日

②Kyohei Norimatsu, “From Space to Event: The Development of Yuri Lotman’s Concept of Translation,” 21st World Congress of the International Comparative Literature Association、ウィーン（オーストリア）、2016 年 7 月 25 日

③乗松亨平「ユーリー・ロトマンの「翻訳」概念」、日本比較文学会九州支部秋季大会、九州産業大学（福岡県福岡市）、2015 年 12 月 5 日

④Kyohei Norimatsu, “Resistant Negativity in Contemporary Russian Cultural Theory”（ロシア語）、International Council for Central and East European Studies IX World Congress、神田外語大学（千葉県千葉市）、2015 年 8 月 7 日

⑤Kyohei Norimatsu, “Policing and Liberating Semiotic Systems: Yuri Lotman’s Theory of Theatricality,” Workshop of Literary Theory

Committee of the International Comparative Literature Association、大阪大学豊中キャンパス（大阪府豊中市）、2014 年 4 月 8 日

⑥Kyohei Norimatsu, “The Limit of Negative Freedom: Yuri Lotman and the Last Soviet Generation”、科学研究費「近現代ロシアにおける公衆／公論概念の系譜と市民の主体性（agency）」研究会「ソ連終焉をめぐる新たなパースペクティヴ—後期ソヴィエト社会再考—」、日本大学文理学部キャンパス（東京都世田谷区）、2013 年 10 月 14 日

〔図書〕（計 1 件）
①乗松亨平『ロシアあるいは対立の亡霊：「第二世界」のポストモダン』、講談社、2015、全 259 頁

６．研究組織
(1)研究代表者
乗松　亨平（NORIMATSU Kyohei）
東京大学・大学院総合文化研究科・准教授
研究者番号：40588711